



Title	M. Weber 宗教社会学研究の研究史的再構成と『プロ倫テーゼ』の修正について：「世界の脱呪術化（Entzauberung der Welt）」概念を中心に
Author(s)	白井，暢明
Description	日本基督教学会北海道支部2021年度公開シンポジウム「マックス・ヴェーバーとキリスト教：マックス・ヴェーバー没後100年（2020年）を記念して」。2021年8月11日。
Citation	日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム記録，6，17-35
Issue Date	2025-07-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95824
Type	conference paper
File Information	jscsh_006_17.pdf



「M.Weber 宗教社会学研究の研究史的再構成と
『プロ倫テーゼ』の修正について」 — 「世界の
脱呪術化 (*Entzauberung der Welt*)」概念を中心に—

白井 暢明

序 1905 年に書かれた『Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus (プロテスタントの倫理と資本主義の精神)』[以下『プロ倫』と略記] 末尾の印象的な記述

「ピューリタンは職業人であろうと欲した。一方我々は職業人であらざるを得ない。なぜなら、禁欲が修道院の僧房から職業生活の中へと移され、世俗内的道徳を支配し始めたことによって、禁欲はその一部として、機械的な生産が持つ技術的・経済的な諸条件と結びつけられている近代の経済組織というあの強力な世界秩序（コスモス）をつくりあげることに力を貸したからである。そしてこのコスモスは、今日、この駆動装置の中へと産み落とされたすべての諸個人—直接生業に従事している者だけではなくて—の生活様式を圧倒的な強制力をもって決定し、そしておそらくは決定するであろう、化石燃料の最後の一片が燃え尽きるまで。バクスターの見解によれば、外的な財への関心は、ただ人がいつでも脱ぐことができる薄いマントのように聖人の肩にかかっているべきものであった。しかし運命はこのマントから鋼鉄の檻 (*ein stahlhaftes Gehäuse*)を生み出させたのである。禁欲は現世を改造し、その中で作用しようと企画したが、そのことによって、この現世の外的な諸財は人間を支配するますます増大する力を、そして最終的にはこれまでの歴史には見られなかったような、免れ得ない力を獲得した。今日、禁欲の精神はこの外枠（檻）から抜け落ちてしまった。・・・かつての宗教的信仰内容の亡霊として、『職業義務』の思想がわれわれの生活の中を

さ迷い歩いているのである。・・・将来かの外枠の中に住むものが誰であるのか、そして、このとてつもない発展の終わりに、まったく新しい預言者たちあるいは古い思想や理想の力強い復活が立ち現れるのかどうか、あるいはしかし—もしそのどちらでもないとしたら—一種の不自然な尊大さで粉飾された機械的な化石化が立ち現れるのか、まだ誰も知らない。ただ、もしそうなった場合には、この文化発展の《最後の人々》にとっては、次のような言葉が真実のものとなるだろう。つまり、「精神のない専門人、ハート（Herz）のない享楽人、この無のものは、人間性がかつて到達したことのない段階に上りつめたのだとうぬぼれる」ということである。」(Max Weber: Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie (以下 RS I と略記): S.203-204)

ここには、この時点ですでに、当時のいわゆる「西欧的“合理主義”」に対して、Weber が、「価値自由（Wertfreiheit）」を唱える彼としては珍しいほどに、否定的な価値評価をしているように思われる。ここでは、合理化の結果として生まれた現代（Weber 当時の）の西欧型社会システム、特に資本主義という経済システムが、もはや逃れがたい「鋼鉄の檻」（システムの硬直化）になっていること、そして同時にこの合理化が現代社会における「理念・意味の喪失」状況を生み出していることへの告発もある。ただし、後述するように、Weber はこの時点ではまだ西洋古代から始まる「普遍的な西欧的“合理化過程”」という歴史的プロセスについての明確な展望はなかったと思われる。

そこでまず第一に、「普遍的な西欧的“合理化過程”」に関する彼のその後の研究の拡大・深化によって、晩年の Weber の「西欧的“合理主義”」＝「鋼鉄の檻」に対する価値評価がどう深化あるいは変化したのか？という問いが生まれる。更にまた、彼の死後 100 年を経過した現代の状況を我々が Weber 的な視覚から見るとどう評価すべきか？という興味深い問いが生まれる。今回の発表ではこれ

らの疑問にささやかな光を当ててみたい。

I 晩年の『プロ倫』改訂と *Entzauberung der Welt* の概念

ところで、このような帰結をもたらした「西欧的合理化」の最も本質的な特徴は何か？ 『プロ倫』の叙述の中に見られるその答えのひとつは、“*Entzauberung der Welt*”（現世の脱呪術化）の概念であろう。この語は次の4か所に出てくる。ただし、これらはいずれも、晩年（1919～1920年）に加筆された部分であることから、その意味と加筆の意図を探ることが重要となる。

- A: 「このこと、即ち教会—聖礼典による救いの完全な廃止こそカトリシズムに対立して全く決定的なことであった。古代ユダヤの預言と共に始まり、そしてギリシャの科学的思考と共同して救いの迫及のあらゆる呪術的手段を迷信であり邪悪であるとして放棄した、*Entzauberung der Welt* というあの偉大な宗教史的過程はここにその完結をみたのである。」 (RS I: S.94-95)
- B: 「《*Entzauberung der Welt*》、即ち救いの手段としての呪術の排除は、カトリックの敬虔においては、ピューリタンの（それ以前ではただユダヤ教のみの）宗教性におけるほどに首尾一貫しては遂行されることはなかった。カトリック教会は彼の教会の聖礼典による恩寵を自己の不完全さを補う手段として用いることができた。」 (RS I: S.114)
- C: 「再洗礼派系諸教派は、予定説の信奉者、とりわけ厳格なカルヴィニストと並んで、救いの手段としてのあらゆる聖礼典を根本的に無価値化し、かくして宗教による *Entzauberung der Welt* を究極的な首尾一貫性を持って貫徹したのである。」 (S.155-156)
- D: 「根本的な *Entzauberung der Welt* は内面的に現世的禁欲以外に向かうべき道を許さなかった。政治的な権力やその行為となんの関わりも持とうとしなかった諸教団にとっては、この

ような禁欲的な諸特性が職業労働の中へ流れ込むということもまたこのことから結果として生じたのである。」(S.158)

これらの加筆部分からわかることは以下の三点である。

- ①いずれも、特にカトリックの聖礼典による救いを「呪術的なものの名残り」とみなし、こうした要素を「被造物神化」として拒否するというモチーフを表現していること。
- ②*Entzauberung der Welt* の過程は、古代ユダヤの預言に始まって禁欲的プロテスタンティズムへ至る一つの「西欧宗教史的過程」として把握されていること。その基礎になっているのは「西欧的合理化過程」への洞察であり、『プロ倫』(アルヒーフ版)の時点では「西欧型合理主義」への着目はあったが、「西欧的合理化過程」への着目はまだなかったと考えられる。
- ③AとBはピューリタンについて、CとDは再洗礼派系諸教派、特にクエーカー派の宗教性についての記述であること。本来教義的基礎を異にするこの二つが *Entzauberung der Welt* 過程の中に組み込まれていること。

このことから、『プロ倫』以降晩年に至るまでの Weber の研究史的考察、特に *Entzauberung der Welt* 概念の獲得時期とその結果としての Weber の関心及び結論の推移をたどることがまず必要になる。

II Weber 宗教社会学の再構成：

Max Weber 宗教社会学的諸研究の成立史

まず、Weber の宗教社会学に関連する論考の実質的成立史を年代順に再構成すると次のようになる。

1904/5 『プロ倫』アルヒーフ (Archiv) 版

1906 『“教会”と“教派”』

『北アメリカにおける“教会”と“教派”』

1907 『現行の批判的論考への批判的注釈』

1908 『現行の“反論”に対する注釈』

- 1910 『資本主義の《精神》に対する反批判』
 『《資本主義の精神》に対する反批判結語』
- 1911/3 『宗教社会学 in Wirtschaft und Gesellschaft
 (以下 WuG と略記)』
 『政治的・教権制的支配 in WuG』
 『儒教と道教 (Konfuzianismus und Taoismus)』 アルヒーフ版
- 1915 『序論 (Einleitung)』 アルヒーフ版
 『中間考察 (Zwischenbetrachtung)』 アルヒーフ版
- 1915/6 『ヒンズー教と仏教 (Hinduismus und Buddhismus)』
- 1916/7 『古代ユダヤ教 (Das antike Judentum)』
 『パリサイ人 (Die Pharisäer)』
- 1919/20 『序言(Vorbemerkung)』
 『プロ倫』改訂部分
 『序論』改訂部分
 『儒教と道教』改訂部分
 『中間考察』改訂部分
 『プロテスタント諸教派と資本主義の精神 (Die
 protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalismus)』
 『一般社会経済史 (Abriß der universalen Sozial- und
 Wirtschaftsgeschichte)』
 『職業としての学問 (Wissenschaft als Beruf)』

III *Entzauberung der Welt* 概念の獲得と古代ユダヤ教 預言者の「使命（倫理・合理的）預言」から ピューリタニズムへのつながり

次に、Weber の *Entzauberung der Welt* 概念使用、及びそれと古代ユダヤの使命預言との関連の認識が生まれた時期を推測する必要がある。この概念は、ほぼ 1913 年以降の彼の論述に登場する。

- ① 『理解社会学の若干のカテゴリー』 (1913)

「たとえば、呪術的な諸問題を基準にして行われる〔整合非合理的な〕行為は、何らかの呪術的でない〔整合合理的な〕「宗教的」行動よりは、主観的にはしばしばはるかに目的合理的な性格をもっている。というのは、宗教的意識はまさに、*Entzauberung der Welt* とともに、ますます（主観的には）目的非合理的な（たとえば「心情的な」または神秘的な）意味関係を前提とせざるをえないからである。」(Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre: S.409)

②『宗教社会学 in WuG』(1911～1913)

「知識人とは、一つの「意味」問題としての「世界」の構想的把握を完成する者である。Intellectualismusが呪術への信仰を撃退し、かくして世界の諸事象が *entzaubern* されて呪術的意味内容を失い、それらがただなお「存在」し「生起」するだけでそれ以上何者をも「意味」しなくなるにつれ、世界と「生活態度」に対する要請は、これらが常に一つの全体として有意義にかつ「意味深く」秩序づけられるべきであるという方向に向かって、いっそう切実なものとなるのである。」(S.308)

「東アジアおよびインドにおいては、賤民的 Intellectualismus も小市民 Intellectualismus も、知られる限りほぼ全面的に欠如している。その理由は、後者の前提となる都市市民の共通感情と、両者の前提である *Entzauberung* とが、そこでは共に欠けているからである。」(WuG: S.309)

③『儒教と道教』アルヒーフ版 第8章：結論 (1911～1913)

「儒教的合理主義とプロテスタンティズムの合理主義との関係をあきらかにすることが大切。・・・ 合理化には二つの尺度がある。A:その宗教がどの程度まで呪術 *Magie* を脱皮してきたか、B:神と現世との関係、そこから出てくる現世に対するその宗教それ自体の倫理的関係が、その宗教によってどこまで組織的に統一されているか。第一の点に関して、禁欲的プロテスタ

ンティズムは、そのさまざまな刻印の中に、その最後の段階を表している。・・・完全な *Entzauberung der Welt* は、このピューリタニズムの場合においてのみ貫徹されたということである。」(RS I: S.512-513)

「儒教の知識人が現世に対する緊張対立がないことに関して、その理由は、倫理的な要求をする超世俗的な神の倫理的な預言といったものが完全に欠如していたからである。」(RS I: S.516)
尚、ここでは「倫理預言の欠如」が出てくる。ただし、古代ユダヤ教の記述はない。

④『序論』(1915)

「*Entzauberung der Welt* と、救いに至る道を瞑想的な《現世逃避》から能動的・禁欲的な《現世改造》へ移したこと、この二つが完全に達成されたのは、ただ西洋における禁欲的プロテスタンティズムの大規模な教会及び教派の形成においてのみであった。その際、全く独自の、純粋に歴史的に制約された西洋的宗教性の宿命が共に作用した。それは一部はその社会的な環境世界、とりわけその発展にとって決定的な社会層の影響であった。しかしまた一部は、それと同じ強さで、その真の性格、即ち超現世的な神と歴史的にはイスラエルの預言と律法の教説によって初めて規定された救いの手段と方法の独自性の影響でもあった。」(RS I: S.263)

(斜字部分は晩年の加筆であり、ここでもまだユダヤの預言とのつながりの指摘はない。)

⑤『中間考察』(1915)

「しかし、合理的・経験的認識が *Entzauberung der Welt* とその因果的メカニズムへの変容を徹底的になしとげてしまうと、現世は神が秩序を与えた、従って、なんらかの倫理的な意味をおびる方向付けを持つ世界だ、といった倫理的要請から発する諸要求との緊張関係はいよいよ決定的となってくる。なぜ

なら、経験的でかつ数学による方向付けを与えられているような世界の見方は、原理的に、およそ現世内における事象の「意味」を問うというような物の見方をすべて拒否する、といった態度を生み出してくるからである。」(RS I: S.564)

「現世の「意味」に関する思索が組織的となり、現世の外的な組織が合理化され、またその非合理的な内容の自覚的体験が昇華されたものとなればなるほど、宗教的なものの独自の内容は、それとまったく並行して、ますます非現世的な性質を帯び、あらゆる生の形あるものとはおよそ無縁なものになりはじめる。そうした道をとったとってよかろう。そして、こうした道を切り拓いたのは、現世を *entzaubern* する理論的思考の力だけでなく、まさしく現世を実践的・倫理的に合理化しようとする宗教倫理の努力にほかならなかった。」(S.571)

⑥『職業としての学問』(1918)

「したがって、理知化および合理化の程度がすすむというのは、自分の生活諸条件についての一般的な知識が増えるということではい。そうではなく、それとは別のことである。すなわち、われわれは欲しささえすれば、いつでも学び知りうるということ、原理的にいうと、神秘的で、予測できない力が働いているということではなく、むしろわれわれが、原則としてはいっさいの事物を予測によって支配できるということ、こういうことを知っていると、ないしは信じているとかいうのが、理知化や合理化の意味なのである。ところでこれは、*Entzauberung der Welt* ということである。現代人はもはや、こんな神秘的な諸力の存在を信じていた未開人のように、精霊をしずめたり精霊に願いごとをかなえて貰ったりするために、呪術にたよるにおよばない。技術的な手段と予測とがあればそれでよい。そもそもこういうことが何よりも、*Intellektualisierung* (主知化) ということの意味なのである。・・・さてし

かし、西欧の文化のうちで何千年来続いてきた、この *Entzauberung* という過程には、および一般的にいえば、学問を肢体とし原動力とするところの、この「進歩」には、先に述べたような、たんに實際上および技術上の意義以上に、なんらかの意義があるのだろうか。・・・ トルストイは言う、文化人にとって死は無意味だと」(Wissenschaft als Beruf, Henrics Großdruck: S.17)

⑦『一般社会経済史』(1919)

「ユダヤ教の近代合理的資本主義に対する決定的な意義：ユダヤ教が反呪術性の精神 *Magiefeindschaft* を遺産としてキリスト教に残したこと」(バール神＝農耕の神に対するヤハヴェ＝火山・地震・疫病の神の勝利)「呪術は技術及び経済のステロ化を意味する」(Wirtschaftsgeschichte: S.307)

「呪術を打破し生活態度の合理化を遂行するための手段は、いかなる時代においても」ただ一つしかない、即ち、偉大なる合理的預言である。勿論全ての預言が呪術の力を破壊するというわけではない。しかし奇蹟その他の手段によって「証し」をなす預言者が現われ、神聖不可侵のものとして受け継がれてきた伝統的秩序を打破することは可能である。*Entzauberung der Welt* を行い、従ってまた、近代の科学・技術および資本主義に対する基礎を創造したものは、まさに預言に他ならないのである。」(Wirtschaftsgeschichte: S.308-309)

尚、ここでは、預言と科学技術の発展との関係が指摘されている。

さて、以上の引用文から、*Entzauberung der Welt* には二つのやや異なった意味、用法があることがわかる。

A: 「*Intellectualisierung* (主知化)」あるいは「合理的・科学的認識の発展」とほぼ重なり合うもの・・・①、②、⑤、⑥

B: 西欧の宗教史的プロセスとしてのもの＝被造物神化の拒否・・・③、④、⑦

さて、この A、B は一見かなり異なる意味内容（領域の違いも含めて）のようにも見える。そこでこの二つのものの親和関係（論理的共通性あるいは歴史的因果関係）はどこにあるのか、考えてみよう。まず A の意味内容については、いわゆる科学的知識・技術の発展ということで、特に⑥の記述から容易に理解できるであろう。これは *Entzauberung der Welt* の結果を重視した捉え方である。しかし、Weber はこの A のみで *Entzauberung der Welt* が貫徹されるとは見ておらず、その成立プロセスを考えるなら、B のいわゆる宗教的プロセス（科学的知識・技術の発展をも包含するような）を重視しなければならないとする。

IV Weber 宗教社会学の成立史概略と

Weber の問題関心の深化・拡大

以上から、Weber の宗教社会学研究全体の成立史と問題関心の拡大等の概略は次のようなものになる。

Weber は『プロ倫』以降、当初の予定を変更して 1911 年頃からアジアの宗教についてその倫理と経済との普遍史的関連の研究に向かった。彼が『儒教と道教』の研究の過程でまず発見した決定的な事実は、シナの一般大衆の全生活領域を支配している「呪術の園」(Zaubergarten) であった。「現世への緊張を欠いた無条件の現世肯定と適応という倫理の内的前提は、純粹に呪術的な宗教性の完全な存続であった」からである。この事実を知った Weber は、翻ってピューリタニズムに代表される西洋的な宗教性一般の中にこれと全く対極的なメルクマールとしての「反呪術性」の精神を強く意識した。

それでは、この反呪術性の精神を生み出す源泉は何か。彼はこの論文において既にそれが「預言 (Prophetie)」であることを指摘している。現世順応的な儒教倫理にはこの預言が欠けていた。そこで彼は現世否定的宗教であるインドの『ヒンズー教と仏教』の研究に進む。そこには確かに預言が存在した。しかしそれは救いのための生

を自ら例示するだけの「模範預言 (exemplarische Prophetie)」であって、神の命により救いのための生を命ずるものではない。つまり、大衆を呪術の園に放置したのである。ここで Weber は大衆を呪術の園から解き放つ「使命預言 (Sendungsprophetie)」(倫理的預言、合理的預言とも言われる) の理念型を獲得し、その実例を古代ユダヤの預言に見出すことになる。厳密に言えば、Weber はこの時点(『ヒンズー教と仏教』の研究の過程)ではじめて、古代ユダヤ教からプロテスタンティズムへと到る西洋の宗教史的発展の基調としての *Entzauberungsprozeß* の概念と観点を獲得したと考えられる。

以上の経緯の中で新たに生じた決定的な点を端的に表現すれば、それは“東洋対西洋”の視点であり、それは同時にまた、「西洋合理主義」、「西洋の合理化過程」の特性という、より包括的な問題関心の中に包摂されてゆくことになる。晩年の「宗教社会学論集」の『序言』(Vorbemerkung) では、普遍的な意義と妥当性を持つような発展過程にある文化現象、つまり近代西洋の文化諸現象を貫く固有の「合理主義」の特性の認識と成立史の解明という課題が立てられ、宗教社会学研究もその一環をなすものとされた。晩年の『プロ倫』の改訂に際して導入されたあの西洋固有の宗教史的過程としての *Entzauberungsprozeß* の概念設定は『プロ倫』をこのような一層広範な問題設定の枠の中に取り込もうとするものであった。『プロ倫』とこの『序言』とを隔てる約 15 年の間に Weber の学問的問題関心は大きく拡大し、変化した(「資本主義」から「西欧合理主義へ」)。晩年の彼の膨大な改訂作業の背景となっているこうした事実を我々は重視しなければならない。

ところで、もし晩年の彼が『プロ倫』と同じテーマを新たに論じたとすれば、そこにいかなる変化が現れると考えられるだろうか。このことを考える際の格好の素材は彼の最晩年の講演に基づく書『一般社会経済史』である。

本書の第四章、第九節「資本主義的心情の発展」によれば、西洋

資本主義を生み出した要因として、「合理的法」等の外的条件の他に、これを補うものとして更に重要なものは「合理的心情」(rationale Gesinnung)、「生活態度の合理化」、「合理的経済エートス」である。何故なら、合理的経済活動が成立するためには、人々の生活を支配している「伝統主義」がまず打破されることが必要であるからである。ここに宗教的要因の重要性がある。そして更に、ここで言われる「伝統主義」は、シナや西洋の中世、近世にみられるような官吏や商人の役得保持への物質的欲求も含めて、呪術的災厄への不安に基づく、行為の「呪術的なステロ化」(die magische Stereotypierung) という、より包括的な概念になっている。つまり、呪術は技術及び経済のステロ化をもたらし、経済生活の合理化に対する最も強固な障害の一つであった。

さてそれではこのような呪術を打破するものは何か。彼によれば、「呪術を打破し、生活態度の合理化を遂行するために手段は、いかなる時代にあってもただ一つしか存在しなかった。それは即ち偉大なる「合理的預言」である。....預言こそが、*Entzauberung der Welt* をもたらし、同時にまた近代の科学技術、そして資本主義の基礎を創造したのである」。彼によれば、ユダヤ教の決定的意義は、それが当初から「反呪術性」(Magiefeindschaft) を持っていたことであり、更にこの特性を遺産としてキリスト教に伝えたことである。その結果、カトリックの聖礼典が呪術の名残りが存続したとはいえ、中世修道院の中で一定の規律をもつ合理的生活態度、即ち「禁欲」が成立した。そしてこの「現世外的」禁欲を「現世的」禁欲に意味転換したのが「宗教改革」であり、そこで二重倫理が撤廃され、禁欲の対象は現生内的活動、つまり職業労働となった。そして更に、主としてカルヴァン派の影響を通じて禁欲の現世的意味もまた承認されることになった。

さて、以上のような論旨を『プロ倫』のそれと比較した場合、論証の重心がここでは明らかに“移動”していることがわかる。『経済

史』においては、『プロ倫』におけるような教義的要因と合理的禁欲との因果関連の指摘が全く欠落しており、『プロ倫』の論証で大きな比重を占めていた「予定説」について一言も触れられていない。即ち、ここでは、カルヴィニズムの教義的基礎を持ち出さなくても、一応この因果関連が説明できるような論証の図式が採用されているということである。そして、ここにおいて「予定説」に代わって最も強いアクセントが置かれているのは「合理的預言」による *Entzauberung der Welt* である。ここでは「伝統主義」が「呪術的なもの」というカテゴリーに吸収され、その結果として、呪術の克服者としての合理的預言が論証の前面に押し出されることになった。それと同時に「予定説」の意義もまた相対化されて、「合理的預言」という、より一般的なカテゴリーへと吸収されていく。こうした観点の変化をもたらしたものが、ほかならぬ Weber 自身の問題関心の深化、拡大であった。

V 宗教による *Entzauberung der Welt* とは？

ところで、Weber が強調する「使命（合理的）預言」と *Entzauberung der Welt* との強い関連性について、その内的論理を理解する手掛かりになるのは、彼の『宗教社会学 in WuG』における論述である。その概略を述べると次のようになる。

呪術の成立は、まず観念的にはこの世界の中にある「非日常的な現象」への着目と、この現象を生じさせる特定の物体や人間のみが持つ「非日常的力」即ち「カリスマ」の意識から始まる。呪術はこのカリスマを認知し、なんらかの行為によってこのカリスマを動かすことによって、なんらかの日常的・現世的な利益を得ようとする主観的に目的合理的な行為である。行為（原因）と結果との因果関係が不明なので客観的に整合的とは言えない。

呪術から宗教への移行に関して、Weber はこのカリスマが「抽象化」され、更に「象徴化」されるという思惟の合理化のプロセスを

重視する。彼によれば、カリスマの観念が最初は単純な抽象化を通じて、一方では呪術師の実践の影響の下に「霊 (Geist)」あるいは「魂 (Seele)」へと移行し、更にその延長線上に「神々」の観念が生じ、ここに超感性的諸力の観念と、それに対応する呪術的行為の世界が成立する。そしてこの「抽象化」が最も進んだ段階になると、カリスマ的諸力と、それを背景に持つ事物・事象との関係は、前者が後者によって“象徴”されるという有意味的連関として説明され、かくして呪術は「直接的な効果を持つ力」から「象徴的表現」(Symbolik) へと転化する。

ところで、このような象徴主義的な現象の重要な側面の一つは「定形化 (Stereotypierung)」の現象である。つまり、一度その有効性を確証された個々の振舞の形式からの僅かな逸脱もその象徴的意味を無化し、更には霊の怒りを招来するという観念が生じ、振舞の形式が変更を許されぬ「聖なるもの」として「定型化」されるという普遍的な傾向である。この段階で人々の日常生活の全領域が、象徴主義的な「呪術の園 (Zaubergarten)」となる。

さてそれでは、このような伝統主義的に定型化された「呪術の園」から、一つの特殊な発展として合理的な「宗教」の世界が形成されるための条件は何か。

まず第一に、それは神観念の体系的秩序づけと人間の神に対する関係の主知的合理化である。そこでは動機の測りがたい神秘的諸力が支配するという神秘的世界観に代わって、理解可能な一貫した動機を持つ神の支配についての合理的世界観が形成される。

第二には、タブー的に固定化された聖なる規範に固有の、個別的な外的行為の「形式倫理」を超えて、内的に一貫した「心情倫理 (Gesinnungsethik)」への純化が遂行されることである。Weber は主として第一の発展の担い手として「祭司」、第二の担い手として「預言者」を挙げる。

ところで、預言的啓示は、常に「生の統一的解釈」を指し示すこ

とによって、生に対する、意識的に統一的な意味を持つ態度決定を要求する。そこでは倫理的に体系化された“コスモス”としての世界が構想されている。こうして預言は、倫理をより内面的な問題として「心情倫理」へと純化し、内的な救済の道を指し示すのである。

このような預言者の理念が、「倫理預言」として合理主義的平信徒層（市民層）に受容される場合、彼らの生活実践は内的に一貫した原理に基づいて倫理的に合理化されうることになる。ここで預言者の権威が「個人カリスマ」に立脚していることは、彼らが伝統的諸価値に一切拘束されない新たな啓示を、それ自身の権威をもって告知することを意味している。従って、預言のみが、伝統的諸権威、更には生の現世的存在様式そのものを最もラディカルに問い直し、時にはこれを“否定”するパッションを内蔵しうるのである。このような意味から Weber は、民衆の生活を伝統主義的定形化による呪縛から解放し、生活の倫理的合理化へと至らしめる一つの“契機”を「倫理預言」の中に見出したのである。

VI Weber 宗教社会学及び *Entzauberung* 概念の現代的意義

さて、『プロ倫』執筆当時の「近代西欧合理主義・合理化」に対する Weber の批判的見解に立ち戻ろう。

この合理主義が持つ問題点、「システムの硬直化（鋼鉄の檻）」や「理念・意味の喪失」はこれまで見てきた西欧的合理化過程＝*Entzauberung der Welt* のいかなる点に由来するのか？ あえて言えば『プロ倫』の時点で Weber が「近代西欧合理主義ないし合理化」に対して抱いたものはまだその結果に対する“違和感”的なものであった。しかし、その後の研究の過程で彼が解明したのは、その独特な成立史、つまり“合理化のパラドックス”であった。特に晩年「合理性」や「合理化」の概念が極めて多義的であることを強調しつつ、Weber が示した西欧的合理化の概略的プロセスは次のようなものである。

プロテスタンティズムの合理的禁欲が有する「合理的禁欲」の歴史的意義がどこにあったかといえ、それは「感覚的な思考・行動様式」及び「伝統主義」の克服、即ち被造物神化の徹底的拒否から生ずる人間の内なる「自然的なもの」の克服であり、それを可能にしたのはこの「禁欲」が内蔵する「非合理性」ないし「非日常性」（カリスマ）がもつエネルギーであった。つまり整合的な目的合理性を核とする近代資本主義システムの成立のためにはある意味で非合理的な「価値合理性」が不可欠の媒介要因になったのである。

では次に、「価値合理性」から「目的合理性」への機能転換はどう説明されるのか。「価値合理性」のメルクマールは、何らかの超越的・絶対的な目標に向かって、結果を顧慮することなくひたすら行為することであった（「心情倫理化」、「自己目的化」）。しかし、次第にこの合理的・禁欲的経営のなかで得られる収益（結果）が、神の祝福のしるしとして聖化（正当化）されるようになった（「世俗化」）。これはまさに結果を重視する「目的合理性」への重心の移動に他ならない。同時にその背面には当初の心情的「意味」の喪失が生じ、「没主観化」や「形式合理性」の強化による外的システムの肥大化が伴う。Weber が論じたこのようなプロセスはまさに、「エートス」の層位で演じられた「合理化」のパラドックスだったのである。

VII Weber の視点から見た現代—再呪術化？

さて、以上のような Weber の分析から 100 年の時を経た今、私たちの前にある現実はどうのようなものか。まず第一に、Weber の言う *Entzauberungsprozeß der Welt* ははたして完結しているのだろうか。

外面的な面で見ると、合理的・科学的知識の発展という意味での *Entzauberung der Welt* は揺るぎないものとしてほぼ完結されているように見える。しかも資本主義的経済システムの基本構造も変わっていない。その結果として、現代では、これが社会制度や人々

の行為、特に経済的行為に大きな「計算・予測可能性」を与えている。勿論、その背景となっているのは、あらゆる社会システムを支える「形式合理性」、「没主観性」(Sachlichkeit)の増大である。しかも現代における経済システムのグローバル化は、このシステムに「鋼鉄の檻」ではなく、一見よりソフトなイメージすら与えている。

では、現代人の内面的・精神的特徴はなにか。我々は少なくとも主観的にはより大きな自由を感じ、それと連動する「価値多様性」、「価値の個人主義化」がその特徴であろう。いま、世界の多数の人々の生活様式は資本主義的経済システムの支配下にあり、彼らが求める「救い」、「救済財」は現世的な「経済的豊かさ(カネ・モノの豊かな所有)」にあるが、他方で、人々はこの「豊かさ」そのものを“自明の善”とし、そこにより究極的価値や意味があるかどうかを考究しない。

しかし、やや視点を変えて現代のシステムを観るとき、様々な疑問点が思い浮かぶ。このシステムは生産—消費—廃棄のサイクルを壊さず、永続的な「経済成長」を続けることを必要とし、そのためには人々の欲望を継続的に創出するためのコマーシャリズムをも必要としている。現代企業の「営利追求」は、経済理論という合理的な推論と手段に基づいているとは言え、結果的には、かつての個人的な際限の無い「営利欲」、「営利衝動」と本質的には変わらない。ここでの「救済財」とは「利潤」や「経済的な豊かさ」の獲得であって、生におけるその究極的「意味」が問われないからである。つまり、Weber が言ったように「このシステムを創り出した精神がすでに抜け落ちている」のである。

さて、このような現代人の生活様式の全体、そしてそれを決定している経済的なシステムはこれまでとは別の意味で、一種の「呪術の園」としての性格をもっていると言えないだろうか？ つまり、一見自由で多様な生活様式もまた、実質的にはステレオタイプなものになり、一種の呪術的固定化になっていないだろうか。我々がい

やおうなしに組み込まれている現代の資本主義的システムはもはや強力な“コスモス”となり、その中での特定の類型的な思考様式や生活様式に無意識的に陥っている状況はまさに「再呪術化」とは言えないだろうか？

現代人の生活様式とそれを支える精神の中には悪しき意味での“呪術”と思われる要素が種々存在するように思われる。経済システムに関して言えば、とりあえず「貨幣信仰」と「経済成長至上主義」が思い当たる。まず貨幣信仰（崇拜）はマルクスによれば価値（目的—手段）の「倒錯であり、「物神崇拜」であった。Weber も触れているように、この本質は現在でも変わらない（彼は言う、「なぜ貨幣でモノが買えるのか、誰も（専門家ですら）説明できない」と）。

そして、「経済成長至上主義」は、Weber の時代には意識されていなかった新たな問題、危険性に直結している。地球温暖化などの環境問題（人類の存続に関わる問題）がそれである（ただし、『プロ倫』の末尾にある叙述の一節、「化石燃料の最後の一片が燃え尽きるまで」という Weber の言葉はすでに、化石燃料の使用による地球温暖化に代表される現在の環境問題に対してさえ“暗示的”である）。今や一種の“信仰”となり、多くの経済人や政治家の頭を“呪縛”している「経済成長至上主義」は必然的に地球温暖化、環境破壊、人類の絶滅へとつながるだろう。

つまり、現代人が求める救済財それ自体が自然環境の破壊により将来失われる可能性、さらにはこの救済財の追求が人類の生存そのものを失う可能性が高まっているのである。Weber が危惧した「鋼鉄の檻」はいまや人々を閉じ込めているだけではなく、まさにその内部から腐食し、生命の土台を崩落させる兆しさを見せているのではないだろうか。

とすれば、この「鋼鉄の檻」、つまり硬直化した「呪術の園」を打ち破るような「使命預言」が現れることを我々は期待しなければ

ならないのではないか？ つまり、「再 *Entzauberung*」もしくは「*Entzauberung* の現代版」が必用なのではないだろうか？

ところで、今後、もしこのような合理的（使命）預言が私たちの前に現われるとすれば、その担い手と内容はどのようなものになるのだろうか。新たな預言者になり得る者は宗教者か？ 哲学者か？ あるいは意外にも科学者か？ そしてもっとありそうもないことであるが政治家や経済人か？

そしていずれにせよある種の「禁欲」、「システムの変更・破棄」を絶対的な権威をもって指示・命令する主体は誰か？ それは今なおキリスト教など世界宗教の神か、それとも無言の自然（災害、ウイルス等を含む）か？ それはまだ誰にもわからない。